日私幼賞受賞　図書紹介

さわらびの　春を求めて
野を歩く

斉藤　美和

出合い＝1＝

私が初めて川崎先生という方とお会いしたのは、『幼児の教育』の誌上でのことです。

『ある三歳とその周辺』と題したその文章は、もちろん、『さわらび』のご本の中にも掲載されています。

電車ごっこに夢中のH君のために、自動販売機で切符を買い求めてH君に手渡すと、

「せがとどかなかったから　渡さなかったの」と不審そうに言われたこと。私は、そんなH君の言葉は、おばあちゃまである川崎先生がH君との普段の生活の中で、H君の心もちを大切にして接していたからこそ発せられた言葉ではないかしらと、その光景を思い浮べて、ホッとため息をつきました。確かに、〝飛びついてきた子ども〟はさっきのあの時のことだけれど、普段心もちを大切にする祖母と孫との関係を持てない別の家であったならば、こんなにもやさしい言葉を発することはないだろうとも思うのです。

さらに、友達を求めて門のさくをのりこえたH君が、週に一回の集団生活の中に飛びこんだ（飛びこまされた）時に、喜んでいかない「ぼくはだめな子なの」と、悲しい顔を見せたという。その彼が「○○さんさようなら、KHさんさようなら」と、降園時の様子を再演して見せ、その時に、いち早く彼が集団生活に溶け込んだことを知ったとか。「喜んで元気に行く」おばあちゃまの裏切りの言葉はあっても、月々たくさんの子どもと接しているおばあちゃまは、やはりH君の気持ちを受け止めてくれる場であったのでしょう。

H君とのほほえましい、しかも深みのあるこの文章に接した時、私は、こんな素晴しい方のお話を聞けたらと思ったものです。この時には、後に、実際に川崎先生と出会いしかもその元で

保育をするという幸せな日々を送ることになるとは、夢にも思わずにいたのです。

出合い＝2＝

二十四年間お勤めになった家政大附属のみどりヶ丘幼稚園を退任なさった川崎先生は、縁あって、埼玉のある私立幼稚園に園長として赴任なさってきました。その園に私も、同じ年（五十二年）の四月から勤めることになり、銀髪の美しい上品な川崎先生に初めてお会いしました。

保育に関しては、小さなことにこだわらずあけっぴろげに子どもと接することを教えていただいたような気がします。細かい教育的配慮についてあれこれ考えるよりも、今その時の子どもとの生活に、全身を注ぐこと、かと言って細やかな心づかいは、常に忘れていないのです。時間が間に合わずあわてて帰してしまった子どものオーバーのボタンをそっとかけて下さったり、楽しいもちつきの日、しまい忘れておもちをなくした子に「せっかくの楽しい日なのだから」とおもちを持ってきて下さいました。担任である私はというと、しまうのを忘れたのは彼だからと、心の狭い考え方しかできないでいたのです。

平林寺のえんま様

川崎先生が、保育者の研修のためにと勉強に私たちを出して下さり、その日の保育を引き受けて下さって、子ども達を、園の近くの平林寺に連れていって下さった時のこと。川崎先生は、かねてからの持論どおり、平林寺の山門をくぐると、矢印の通りに自分で歩いていくようにと、子どもたちを離し、途中えんま様の前で立ち止まる子どもたちと「こわい目だね」と話し合ってから、又、三々五々に目的の地まで。その様子を見て「並んでいかない園児など見たことない」と受け付けの方が言ったとか言わないとか。「平林寺のえんま様は、後ろにも目があるのかしら」と笑ってお話しなさったけれど、それ以来、『さわらび』の本でも触れていますが、私立の園において、保育の心を貫ぬくことのむずかしさを感じながら、時にその実態に苛立ちながらも、常に若い私共保育者の道標となって下さいました。

母の心

私が、『さわらび』の本の中で最も感動して読んだのは、「花に

寄せて」の章と、お嬢様との手紙のやりとりをかかれた章です。

ご主人を肺炎で亡くされたことは、お話にも聞いてはおりましたが、この本を読んで封建性の色濃く残る地方の婚家を、三人のお子さんを育てるためとは言え、どんな思いで出て行かれたのだろうかと、生意気なようですが心中察するに余るものがございました。

勉学に励む子のために、夜食をつくってあげられずとも、なお本ものの母の心を持ってお子さん方を育て上げていらしたことに深く感動したのです。

まだ母になれないでいる私は、もし母になれたなら、働く母の背中を見せながら、しかも小さな肩寄せ合って暖かく生きていける家庭をつくっていきたいと思いました。

おしかり

「臨時だけれど、いい所があるのよ。頑張って保育の道を歩いていれば、きっといつか拓けるわ」との川崎先生の暖かいお言葉。

「私としては、ずっと保育の道を歩いていきたいのですが、家の方でちょっと問題があって」と何とも恩知らずな私の言葉。

「もう、私は知りませんよ」

思ったより以上に厳しい先生のお言葉に私は初めて、保育の道を歩こうとする人間にはいい加減が許されないことを知りました。

この三月にわけあって、二年勤めた園を去った私に、大きな課題を預けて下さったのです。

春を求めて

川崎先生は、園長をおやめになって、淋しいのではないかしらと、お聞きしたら、「いいえ、ちっとも。私は、これからぜひ花開かせたいことがあるから。内緒だけどもね」といたずらっぽく笑ってお話しになりました。

川崎先生は、まだまだ素敵な春を求めて、お元気な足で歩いていらっしゃいます。決して、若い人の重荷にはなりたくないと、ご自分のしっかりとした足取りで。

私も、美しい銀髪になるまでも、子どもと共に歩いていかれたらと思います。

（浦和一女附属幼稚園）